

研究報告書 (S14724NRF)

受入研究者 京都大学文学研究科・教授 吉本 道雅

招聘研究者 檀国大学校人文科学大学・教授 SHIM Jae-hoon

採用期間 平成 26 年 11 月 12 日～平成 26 年 12 月 17 日 (36 日間)

採用期間終了後の本邦滞在期間 平成 26 年 12 月 18 日～平成 26 年 12 月 19 日 (2 日間)

受入研究者は、1980 年代より先秦史研究に携わり、その成果の一部を、『中国先秦史の研究』(京都大学学術出版会、2005)として上梓しているが、直近では 2013-2015 年度基盤研究(c)「出土文献に基づく左伝学の再構成」の研究課題で研究を進めつつある。

招聘研究者は、シカゴ大学で学位を取得したのち、シカゴ大学・イェール大学で 10 年にわたって教職に就き、現在は韓国・檀国大学校教授を勤めている。先秦史研究について、韓国のみならず中国語圏・英語圏をも含めた代表的研究者の一人である。

今回の研究課題は「『繫年』および『史記』十二諸侯年表に見える周王朝の東遷」である。今日の先秦史研究において最も先端的な領域の一つが、戦国時代の楚簡を用いた研究である。『郭店楚簡』(文物出版社、1998)について、『上海博物館藏戦国楚墓竹簡』(上海古籍出版社、2001～)・『清華大学藏戦国竹簡』(中西書局、2011～)が継続刊行中である。これら戦国楚簡のうち、先秦史研究に最も大きな影響を与えうるものが、『清華大学藏戦国竹簡 [貳]』(2011 年 12 月)に収録された『繫年』である。『繫年』は清華簡 2500 枚のうちの 138 枚であり、23 章に分かれ、西周時代から戦国時代前期の歴史を紀事本末体で記している。受入研究者は、2013 年 3 月に「清華簡繫年考」(『京都大学文学部研究紀要』52)において『繫年』の包括的研究を提示した。春秋部分に『左伝』の「抄撮」(ダイジェスト)に取材したと推定される記述が多いなど、『繫年』の記述は伝世文献と重複する部分が多いが、一部においては独自の記述をもつ。その一つが第 2 章の周王朝東遷の経緯に関わる記述である。周王朝東遷の年次は、『史記』十二諸侯年表の平王元年(770BC)が一般には受容されてきたが、『繫年』は独自の経緯を記し、東遷を 738BC とする。受入研究者はつとに「周室東遷考」(『東洋学報』71-3・4、1990)において、『史記』の記述を包括的に批判するとともに、『左伝』・『国語』鄭語・『古本竹書紀年』を主要な材料として、東遷の復元を試み、738BC 東遷説を提唱していた。『繫年』第 2 章の記述は 738BC 東遷という点においては四半世紀前の卑見を支持するが、その他の点では卑見の再検討を迫るものであった。

招聘研究者とは、共通の友人である Lothar von FALKENHAUSEN 氏(UCLA 教授)の紹介ののち、著作・研究情報を交換するようになっており、今回の招聘に至った次第である。

11 月 12 日(水)、京都到着後の採用期間中、火曜日・金曜日には原則的に受入研究者の研究室において、研究課題に関連する招聘研究者の著作 2 篇

(1) 「전래문헌의 권위에 대한 새로운 도전 — 清華簡「繫年」의 周 왕실 東遷 —」(伝来文献の権威に対する新しい挑戦—清華簡『繫年』の周王室東遷—)(『歴史学報』221、2014 年 3 月)

(2) “ E in the Zuozhuan and the Xinian: A New Understanding of the Eastward Evacuation of

the Zhou Royal House ”(『左伝』と『繫年』における鄂一周王室東遷に関する新しい理解一) (The Second Overseas Academic Week of Wuhan University · International Forum for the Study of Chinese Excavated Texts 2014 武漢大學第二屆海外學術週・中國簡帛學國際論壇 2014、2014年10月)

を素材に討論を行った。

(1)は、〈I 東遷の疑問と『繫年』の発見〉〈II 傳來文獻の西周滅亡と東遷〉〈III 『繫年』の東遷：謎の解消〉〈IV 新しい謎〉〈V 「十二諸侯年表」に對する挑戦?〉〈VI 結び〉、(2)は、〈序言〉〈第一章 『繫年』の東遷における二つの争点〉〈第二章 『左伝』における鄂と隨〉〈第三章 郷寧への比定の問題と新しい可能性〉〈第四章 不詳だが折り合いは付く〉〈結語〉の構成を採り、『繫年』第2章に関する最先端の研究成果といえる。

受入研究者があらかじめ両篇の日本語訳稿およびコメントを作成し、招聘研究者と討論する形式で進めた。

また火曜日の午後にはあわせて受入研究者の担当する京都大学文学研究科・大学院演習「中国古代史史科学」に招聘研究者も参加し、蘇建洲・呉雯雯『清華二繫年集解』(万卷樓出版公司、2013年12月)の2章の部分の輪読を行うとともに、(1)を素材に討論を行った。

週日の月曜日・水曜日・木曜日については、討論の準備を行った。

そのほか、招聘研究者は京都大学文学研究科図書館・京都大学附属図書館および泉屋博物館・野村美術館・京都国立博物館・Miho Museum・奈良国立博物館・東京国立博物館において資料調査・資料収集を行った。

また、11月18日・12月5日、宮宅潔・京都大学人文科学研究所准教授と懇談し、11月29日、名和敏光・山梨県立大学国際政策学部准教授および小寺敦・東京大学東洋文化研究所准教授の招待で、東京大学東洋文化研究所で開催された第70回上海博楚簡研究会にて(2)を素材に講演を行い、平勢隆郎・東京大学東洋文化研究所教授などと懇談し、12月4日、藤田勝久・愛媛大学法文学部教授と懇談した。

採用期間終了後、12月18日には受入研究者主催のシンポジウム「『左伝』と春秋史」にてコメンテーターを勤めた。

今回の研究成果については、『東洋史研究』への寄稿を予定している。

今回の招聘において、研究課題に関わる討論を通じてさらなる研究を展望する成果が獲得できたことはいままでのないが、これに加えて、日本の国際的研究交流の将来的発展に裨益するものと確信する。かつては、中国との研究交流に制約があったこともあり、中国学において日本と英語圏の交流は密接であった。ところが、1980年代以降、中国との交流が盛んになるにつれ、日本と英語圏の交流は稀薄化した。近年、英語圏における先秦史研究は飛躍的な発展を遂げているが、日本の研究者は、中国語圏との交流をもっぱらにし、むしろ韓国の研究者の方が、英語圏との交流が密接である。今回の招聘を契機に、日本の研究者の英語圏との交流を強化することが大きく期待される。

公開シンポジウムの御案内

日時 2014年12月18日(木) 18:00-20:00
場所 京都大学文系学部部长室 302号室

講演 『左傳』と春秋史

吉本 道雅 氏 (京都大学文学研究科 教授)

『左傳』は春秋史研究の最も基礎的な文献だが、その記述のありかたは決して一様ではない。年次ごとの字数や月日の分布など、時期によってかなり顕著な増減が認められる。それら定量的分析に堪えるいくつかの材料のうち、本報告では『左傳』における月日の記述を素材に、『左傳』の性格の一端を解明する。

(コメンテーター)

沈 載勳 氏 (檀国大学校人文科学大学 教授)

歡迎來聽

連絡先 tel 075-753-2737
mail michimasay@nifty.com